「そう、俺が勝ったからな。それは、俺の存在意義が其処で終了するから。全部、お終い。」

何、それ。

あたしはきょうやに縋りついた。

勝っちゃだめ！あやめときょうやと、お泊りするんだもん。だから、だめ。

涙が出てきた。

視界がじわじわして、ぐらぐらして。きょうやに抱っこされたまま首に抱きついた。

「っとぉ！……お、そういや、ぜむすにちゃーんとお泊りの許可は貰えたかー？」

もらえたよ。もらえたから。だから。

きょうやもからすもいなくなっちゃやだ！だから勝っちゃだめ！勝っちゃだめなの！！

そしたらきょうやはいつもの調子で、あたしを撫でながら

「やだ、オジサンの硝子のハートがきゅんきゅんしちゃう。そーさなァ。そんじゃ、less頑張っちゃう？」

頑張る？頑張れるに決まってるじゃない。何を何を頑張れば……。

がんばる。…あたしが頑張れば、なにか、かわるの？

あたいはきょうやを見上げた。涙がほっぺを伝った。

「おーおー、可愛い顔が台無しよ。やっだ、惚れ直しちゃう。変わる変わる、人の念ってーのは馬鹿に出来ねーんだぜえ。」

きょうやは涙を拭ってくれた。

だからあたしは頑張るってきめたんだ。

＊　＊　＊

思いの強さならしょうは誰にだって負けないって言った。でもあたしも負けるわけにはいかなくなった。

しょうが、あやめが、ゆみこちゃんが、えじが。色んな思いが渦巻いているけどみんなきょうやとからすを助けたいんだ。

ぜむすには相談出来ないから、しょうに相談しに行こうと館に行った。からすの部屋にしょうはいなかった。

話し声が聞こえて３階のサロンに向かった。人が集まってるみたい。

知った顔も多い。しらない顔もいる。しょうもいた。しょうは前に会った時とても弱っていたから心配だったけど、また大人に戻っていた。

というか、あたしの名を呼ぶあたしより小さい女の子は誰？なんだか見覚えが……

とりあえず近づいてみた。すごく見覚えがある。犬のお耳とか。

なんだかいかにも貴族って感じのおにいさんがをその子の隣に座ってた。にこりと挨拶してきたけどなんだかその子に質問しようとしてたみたい。もしかしなくてもこの子って

「ぅん、ぇっと、ひょっとしてひょっとしなくてもきょうや？」

貴族っぽいお兄さんに挨拶したりしながら返答を待った。お隣に腰掛けて。

「そ、…ぉ……ゆーこった。オジサン、ちょっと悪いマホーにかかってな。」

やっぱしきょうやだった。お耳ぴこぴこさせながら。へんなの。

貴族のお兄さんの多分一つ目の質問はきょうやとからす、げーむにかてばホントに二人とも生きながらえるのか、みたいな感じ。

「審判、なんだってさ。　んで、審判の勝者は恭哉。　だからぼくたちはこれから恭哉が用意したゲームに勝たなきゃなんないんだって。」

みんとと名乗った猫さんがあたしに告げた。

「ぅん。それはきょーやに聞いて知ってる。あたしは、やるっていった。」

あたしはこくこく頷いた。

きょうやと貴族のお兄さんのそれからの話はあたしにはちょっとむづかしかった。

だから話には聞いてたけど初めてあったせれねとお話してた。

「ふや。」

不意にきょうやにほっぺつんつんされた。

「まーさか青年が、それに質問いっこ使うたぁ思わなかったなー。その方法は、まずはおれに勝つコト。それから、そっちの少年が、あれの核作りにせーこーするコト。そうして、おれに生きるリユウをくれるコト？」

しょうを指したりしながらきょうやが話をする。

また、だ。

「あたしや、あやめがいるだけじゃ、生きる理由になんない？」

あたしは眉を下げた。

「ぼくもれすに同意だなー。　お前に死んで欲しくないってーのは結構いるんじゃないの？　それじゃ足りない？」

「私も消えて欲しくはありません。それじゃ、駄目なんですか？」

みんとが、せれねが、あたしに続いた。

きょうやは少し考えてから。

「うまれて死んで、生き返っても、別の生き方ってーのはかんがえたこと、なかったからねえ。」

と、答えた。

「……カラスは貴方が望まれるなら、第二の生を生きて欲しいそうですから。今の貴方はお兄様のためだけに此処に居るから　ですか？」

きょうやの兄。冊子で読んだ限りしか知らないけど、もう死んでしまったきっときょうやの大事な人。

何時までもう無いものに縋りつくのは愚かだ。

「今も、昔も、おれのセカイはアニキのためだけにあるんだよ。」

きょうやは貴族のお兄さんに向って、当たり前のようにそう言った。

なんて狭い世界！

少しだけ昔の自分を思い出す痛みだけで出来た世界。人との繋がりは痛みを介してだけ。

そんなあたしに、りとるは『less』という名前を与えた。世界に光が満ちた。でもりとるはあたしの世界からいなくなってしまった。

あたしはりとるを追った。追いかけて追いかけて、あたしは広い世界を知ることになる。

自分はなんて狭い世界に閉じこもっていたのだと。

「じゃあ探そうよ。理由なんて誰かに貰うものじゃないもん。だれだって理由を探して生きるものでしょう？一緒に生きてほしいと思う人がいるんだから、そのために生きてよ。」

ちょっとだけ涙がでた。あの人が死んだ時のことやあずが死んだときのこと思い出した。

「んじゃちょこっと考えて見てよ。　全部終わったら誰かの為とかじゃなくさ。　恭哉が楽しいってなじんせーもっかい送ればいーじゃん。」

みんとが続いた。

「あー…、うー…、ほんと、おじょーちゃんってば、たまに大人だよなぁ。じゃあ、やっぱ、おれとの勝負しようぜ。おれが負けたら、いっしょにさがしてくれよ。」

「ぅん！いっしょにさがす。だから、勝つよ。」

もちろん勝つつもりだった。だからあたしは笑った。涙は引っ込んだ。

「とーぜんよ。　約束したかんな。　だからちょびっとで良いよ。生き残ることも考えてよ？　お前に勝ってやるから。」

ね。とみんとがこっちを見た。だからこっくり頷いた。

「ご息女もいらっしゃるのにまだブラザーコンプレックスですか。そのお気持ち、分かるのが何か悲しいです。ほんと、そちらのレディの方が余程大人ですね。」

貴族のお兄さんがなんかあたしを見た。意味はよくわかんなかった。

きょうやの気持ちが分かるってなんだろう。この人も過去の亡霊に取りつかれているんだろうか。

あたしが不思議そうな顔をしたら貴族のお兄さんは笑った。―――よくわかんない。

きょうやはせれねの猫のお耳を触ってた。みんとはしょげしょげしてた。だからみんとの肩をぽんってした。

あたしの胸で泣けばいいとおもった。みんととせれねは婚約者なんだって。

せれねのお耳を触り終わると、きょうやはあたしのお膝に乗っかった。

いつもあたしを抱っこしてくれてるのに、今日はあたしの方がお姉さんだ！ちょっと嬉しい。

「後一つ残ってますよ。貴方がお兄様に託された　遺言とは？」

貴族のお兄さんがそんなきょうやに問うた。

「オレが死んだら、あれをよろしく頼む。」

きょうやはたった一言そう答えた。

あたしは小さいきょうやの頭を撫でた。

きょうやは髪が長くなってた。ぼさぼさで、ただ結んであるだけだから三つ編みにしちゃおうと思った。

ほどいて、手櫛で髪をさくさくやった。自分のリボンをほどいて、きょうやにつけてあげた。

「…やっぱカラスを助けて自分が消えるつもりだったわけだ。」

みんとが言う。

「カラスのこと…？けれど貴方が核ごと消えればカラスは消える。代理となる核を作ることが出来れば話は別でしょうが。」

貴族のお兄さんがいぶかしむ。

「 やだぁ、猫さんってばスルドイのね。アニキがおれに、たのむ、って言ったからな。」

「だから、審判する気だったんじゃない？　カラスに勝たせるつもりで。」

「そう。おれが消えれば、あれも消える。だけど、できる限りの手はつくしたし、あれが消えるなら、もう世話をやくたいしょーも居ない。だから、おれはアニキとのヤクソクを全うしたことになる。」

みんとときょうやのやりとり。あたしは少しさみしくなってきょうやを抱きしめた。

「……きょうやは何でそんなに簡単に自分の意味を決めちゃったのかな。」

「おれのセカイには、きっと生まれてからずっとアニキしか居なかったんだよ。生まれて、死ぬまで、死んでからも。」

きょうやの小さな手があたしの頬をつついた。

きょうやの手にあたしの涙がつたった。もう何も聞こえない。きょうやの言葉が頭にぐるぐる駆けまわった。

もう、耐えられなかった。

あたしはきょうやを膝に乗せたまま立ち上がって、落ちたきょうやのほっぺを全力で打った。

「あでっ！！ 」

「……ただきょうやが狭い世界しか見なかっただけじゃない…**生きる意味を他人に望んで自分の身を削っていればそれで幸せだったっていうの！？**」

あたしは立ちつくした。思いの丈をぶちまけた。

きょうやは何故か正座していた。

みんとの、「愛でしょ。」という言葉が聞こえた気がした。

「や、おれとしちゃー…あれは、正直どうでもいいかなぁ、なんて…いや、でも、アニキとのヤクソク果たしたことになんねーなら…ええと　…その、はい。シアワセでした。」

その言葉にあたしはさらにビキっときた。

「きょーやの馬鹿！！**そんなんだからつばきがいっしょにお風呂入ってくんなくなるんだよ！！**他は！？つばきは？大事じゃないの？　自分がどれだけ人に触れて生きてるか考えたことある？無いでしょ？だから、あたしのきもちも、あやめの気持ちもわかんないんだ。だから簡単に生きる理由をくれなんていえるんだ。」

あることないこと吐いた。実際にそうなのかは分かんない。でも、きょうやのつばきへの愛情を疑った。あんなに大事にしていると思ったのに。その程度だったんだ。

涙がこぼれる。

とん、と助走をつけて、きょうやを蹴り上げようとした。

「lessさん。」

後ろからセレネがあたしを抱きしめた。あたしはおもいっきり抵抗した。

「……い、いや、その、…そりゃ、大事っちゃー…大事なんだけど…」

きょうやは何か言い淀んでいるそれがますますあたしを苛立たせた。

「…蹴っちゃ駄目だよ。お説教はいいけど、それはさすがに駄目。」

せれねに抵抗しながら、きょうやの腹を蹴った。

「いや、なんつーか、おれにも…サイアクな父親だっつー…じかくは…ｺﾞﾌｫ！！」

当たった。きょうやは後方に転がった。

「まぁ、これだけ言われて心が動かないのであれば、それまでですね。」

貴族のお兄さんのそんな声が聞こえた。

「離して！！」

せれねはまだ離れない。ガンガン肘を打ちつけた。

「駄目。怒るのはわからなくもないけど、それでも暴力は駄目だよ。」

「れすは、恭哉が好きだからさ。悔しいんだよね？　恭哉だってさ。れすや椿姫やあやめの事は好きでしょや？　その好きな人がさ。　自分の事もどうでもいいって思ったら、そりゃ悔しくなると思うよん？」

みんとの声が聞こえた。なんか、言いたいこと的確に言ってくれた気がしたけど、それでもあたしの怒りは収まらない。

「がぁー！！」

あたしは吠えた。したばたもがいた。もがいてもがいてもがいた。

せれねのことは、全然考えなかった。心のどっかで、竜だし、大丈夫だろう。と思ったのかもしれない。

「や、まー……そーなんだけどなあ。スキだぜ、おれも、猫さんやレス、だーぁいすきだとも。　れーす、れすれす、おれがわるかった。わるかったから。」

「…lessちゃんの言葉はちゃんと届いてるよ。」

セレネはどれだけ打たれても蹴られても優しく語りかけた。それでも気は納まらなかったけれど。

「ぜーはーぜーはー。……わかったかきょうやぁ！？」

きょうやはこくこく頷いて。

「わ、わかった！おれが、わるかったです！マジわるかった、わるい父親でした！もうしません！」

「そうじゃねぇー！！！！！しませんじゃねぇこれからだろうがぁーっ！！？」

ここが館だということも忘れて叫んだ。

「！！」

大きな声にびくっとなって、せれねが手を離した。

「は、はい……こ、これから…、がんばります……」

きょうやの影がしゅばっと逃げた。ふるふる、しょげた耳としっぽが震える。

「忘れましたって顔してんじゃないよ！！……いったね？『これから』」

きょうやの襟元掴んで。引き上げる。

「　……え、いや、だか…っ…い、……いいました。」

「何を？」

あたしは涙でぐしゃぐしゃになった目を細めた。きょうやはあたしの涙を拭おうとした。

「…だから、その、ちゃんとレスとか、みんなのきもちもかんがえるし……ひとに、自分の生きる意味とか、もとめたり、しません。」

「分からない癖に中途半端に優しくしてんじゃないよ！！」

首をふり、きょうやのおでこ目がけて頭突きをした。まだだ。まだ治まらない。

「え…　っでええ！！！」

きょうやの脳が揺れた事だろう。

「ほんとはなんにも見えてない癖に中途半端に優しくしないで！何を思ってつばきを育てたの？全部お兄さんのため？」

「や、…そのっ、なんつーか……好きは好きで、大切、なんだぜ…っ、た、ただ…おれは、…その、ゆーせんじゅんいの、いちばんうえに…アニキがいる、っつーか…」

「 レス――さん？　一度、その辺りで。」

ここで貴族のお兄さんが仲裁に入った。そこで初めてみんととせれねが居なくなってることに気が付いた。

それでもそこに気が行ったのは一瞬で。

「極端すぎるんだよ！軽い態度とって、優しくて欲望に正直な振りして…ぅぅうぅう…*あーーーーん！！！！*」

嗚咽が止まらなくなった。何がそんなに悲しい？きょうやがこちらをみないこと？それとも生きようとしないこと？昔の自分を見ているようだから？

「ああ、ほら、泣くなよ。なー、おれが悪かったから、なきむしさんだな。あー…ほら、な、がんばってみるから。な？」

もう一度恭哉の手があたしの頬を拭った。

あたしの脇に腕を通して、貴族のお兄さんがあたしを抱き上げた。……きょうやを掴む手は離さなかったけど。

「なきむしじゃないもんひぐっきょうやのせいだもん…」

「えー、すげーなきむしなイメージあるぜー…っとと。」

「レス、放してやれ。此処でコイツ死んだら元も子もねぇぜ？」

しょうの声に顔を上げた。ちょっと不満だったけど、怒りは大分治まってて。手を離した。

「えぇ、ですね。けれど価値観は人それぞれですよ。」

貴族のお兄さんは訳知り顔で――後ろだから顔みえないけど――そう言った。

むっとした。不動の道徳に勝る価値観の中で生きるのはただの自己陶酔だ。

人の中で生きる以上その感覚は捨てなければならない。あたしがぜむすと暮らす中で学んだことだ。

貴族社会の狭い世界の中で暮らすこの人に何を言っても無駄だろうとは思ったけど。

きょうやにはそうなってほしくない。広い世界を知ってほしい。世界には楽しいことがいっぱいあるんだって。「ぅ。」

貴族のおにいさんの

顔に肘を打った。鼻を狙ったけど、顎に逸らされた。……ちっ…。

しょうときょうやが何か話していたけど、あたしにはよく分からなかった。

冷静にはもどっていたのだけど。

「ふふ、怖いお嬢さんです。物怖じしないところは好ましいですが。」

ちょっとむっとした。この人に好かれても嬉しくない。

それから貴族のお兄さん。の名前を聞いた。クォールツというらしい。あたしには上手く発音出来ない。

しょうがおでこになにか冷たいものを貼って、涙と鼻水をふいてくれた。

いくらかすっきりしてから、あたしは帰ることにした。

しょうは核を取り出そうとしてたみたいだけど、断られた。どういうことだろう。

まだ、チャンスはある、はず。あたしたちはなんとしても勝たなければならないのだ。

……今度、からすにも会いに行こう。

からすは事情を知っているだろうか。心配だ。

きょうやは最後にはありがとうと言った。髪を三つ編みにしたことを。あんなに殴る蹴るしたのに、なんだかんだいって、お人よしだ。